

HP OpenView Performance Insight

Stratacom Preprocessor and Stratacom Datapipes ユーザーガイド

ソフトウェアバージョン : 3.0

Reporting and Network Solutions 7.0



2005 年 6 月

© Copyright 2004 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

ご注意

1. 本書に記載した内容は、予告なしに変更することがあります。
2. 当社は、本書に関して特定目的の市場性と適合性に対する保証を含む一切の保証をいたしかねます。
3. 当社は、本書の記載事項の誤り、またはマテリアルの提供、性能、使用により発生した直接損害、間接損害、特別損害、付随的損害または結果損害については責任を負いかねますのでご了承ください。
4. 本製品パッケージとして提供した本書、**CD-ROM**などの媒体は本製品用だけにお使いください。プログラムをコピーする場合はバックアップ用だけにしてください。プログラムをそのままの形で、あるいは変更を加えて第三者に販売することは固く禁じられています。

本書には著作権によって保護される内容が含まれています。本書の内容の一部または全部を著作者の許諾なしに複製、改変、および翻訳することは、著作権法下での許可事項を除き、禁止されています。

All rights are reserved.

Restricted Rights Legend.

Use, duplication or disclosure by the U.S. Government is subject to restrictions as set forth in subparagraph (c)(1)(ii) of the Rights in Technical Data and Computer Software clause in DFARS 252.227-7013.

Hewlett-Packard Company

United States of America

Rights for non-DOD U.S. Government Departments and Agencies are as set forth in FAR 52.227-19(c)(1,2).

Copyright Notices

© Copyright 2002-2004 Hewlett-Packard Development Company, L.P., all rights reserved.

Trademark Notices

OpenView は、Hewlett-Packard Company の米国の登録商標です。

Java™ は、米国 Sun Microsystems, Inc. の商標です。

Oracle® は、米国 Oracle Corporation, Redwood City, California の米国における登録商標です。

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Windows® および Windows NT® は、米国 Microsoft Corporation の米国における登録商標です。

原典

本書は『*HP OpenView Performance Insight Stratacom Preprocessor and Stratacom Datapipes User Guide Software Version: 3.0 Reporting and Network Solutions 7.0*』 Manufacturing Part No. none (November 2004) を翻訳したものです。

サポート

次の HP OpenView の Web サイトを参照してください。

<http://openview.hp.com/> (英語)

<http://www.hp.com/jp/openview/> (日本語)

これらのサイトには、HP OpenView の提供する製品、サービス、サポートについてのお問い合わせ先や詳細が掲載されています。日本語サポートサイトを表示するには、上記英語版サイトから [**サポート**] をクリックし、[**Software Support Online**] をクリックしてください。サポートサイトでは、お客さまのビジネスの運用に役立つ対話形式の技術サポートツールに手早く効率的にアクセスできます。サポートサイトでは次のことが可能です。

- 関心のあるドキュメントを検索する
- サポートケースを登録 / トラッキングする
- サポート契約を管理する
- HP サポート契約を調べる
- 利用可能なサービスに関する情報を確認する
- 他のお客様とのディスカッションに参加する
- ソフトウェアトレーニングの検索および登録を行う

サポートの多くでは、HP Passport へのユーザー登録とログインが必要です。また、サポート契約が必要な場合もあります。

アクセスレベルに関する詳細は、次の URL で確認してください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

HP Passport ID のご登録は、次の URL で行ってください。

<https://passport.hp.com/hpp2/newuser.do> (英語)

第 1 章	概要	7
	Stratacom デバイスから OVPI へのデータの移動.....	7
	ユーザーのタスク.....	8
	追加情報の入手先.....	8
第 2 章	Preprocessor のインストール	9
	インストールの前提条件.....	9
	パッケージの内容.....	9
	ディレクトリ構造.....	10
	環境変数の設定.....	10
	Windows で Stratacom 環境変数を設定.....	10
	Stratacom Preprocessor のインストール.....	11
	正しくインストールされたことを確認するテスト.....	12
	.pro ファイルのテスト.....	12
	出力ディレクトリ.....	12
	パッケージの削除.....	13
第 3 章	Stratacom Datapipe のインストール	15
	円滑なインストールのためのガイドライン.....	15
	ソフトウェアの前提条件.....	15
	分散環境.....	16
	Stratacom Datapipe のインストール.....	16
	パッケージの内容.....	17
	入力ファイル名.....	17
	TEEL ファイルと指令.....	17
	SourceDirectory.....	18
	SourceDisposition.....	18
	Datapipe の削除.....	18
第 4 章	設定ファイルの編集	19
	設定ファイルのフォーマット.....	19
	設定ファイルの例.....	19
	索引	21

概要

Frame Relay Report Pack または ATM Report Pack を使用して Stratacom デバイスを監視する場合は、Stratacom Preprocessor をインストールする必要があります。Stratacom Preprocessor は、Stratacom デバイスからデータを取り出すユーティリティと OVPI データパイプとの間で、変換とフィルタリングを行う仲介者の役割を果たします。このようなユーティリティの 1 つに Cisco Statistics Collection Manager があります。

変換は実行する必要がありますが、フィルタリングは通常、任意で実行します。変換とは、OVPI がインポートして処理できるファイルを生成するものです。フィルタリングの目的は、不要なデータを取り除いて OVPI サーバーの負担を低減することです。

本マニュアルでは、Stratacom Preprocessor のインストールと設定の方法について説明します。また、Stratacom Preprocessor を使用する Stratacom データパイプのインストール方法についても説明します。Stratacom Preprocessor と Stratacom データパイプは別々のパッケージですが、必要に応じて、同時に両方のパッケージをインストールすることができます。

Stratacom デバイスから OVPI へのデータの移動

Frame Relay Report Pack または ATM Report Pack に表示されるパフォーマンスデータは、ベーステーブル内にあります。以下に、パフォーマンスデータが Stratacom デバイスからレポートパックのベーステーブルに移動するまでの流れを示します。

- 1 Stratacom デバイスが統計データを収集します。
- 2 ユーティリティがデバイスから統計データを取り出して、バイナリフォーマットのファイルを作成します。
- 3 Stratacom Preprocessor はユーティリティからバイナリフォーマットのファイルを受け取り、解読します。
- 4 Stratacom Preprocessor が各ファイルを変換し、不必要なデータを取り除いて、ee_collect が使用できる ASCII CSV フォーマットのファイルを生成します。
- 5 ee_collect が Preprocessor によって作成されたファイルを読み取って、データをデータパイプのフィーダテーブルに追加します。
- 6 trendmapper が、データパイプのフィーダテーブルに格納されたデータをレポートのベーステーブルに追加します。

Stratacom Preprocessor が出力したデータは、複数のデータパイプで使用することができます。複数のデータパイプが動作している場合、各データパイプについて上記の手順を繰り返します。

ユーザーのタスク

ユーザーのタスクは以下のとおりです。

- Stratacom Preprocessor をインストールする
- インストールが正常に終了したことを確認する
- プロシージャファイルがスクリプトを正しく呼び出していることを確認する
- 少なくとも 1 つの Stratacom Datapipe をインストールする
- データパイプディレクトリにある設定ファイルを、Stratacom Preprocessor ディレクトリにコピーする
- 必要であれば、設定ファイルを編集する

 通常は、設定ファイルを編集する必要はありません。

追加情報の入手先

本マニュアルに関連するドキュメントには次のものがあります。

- 『Stratacom Preprocessor 3.0 Release Statement』(英語)
- 『Frame Relay Report Pack 4.0 ユーザーガイド』
- 『ATM Report Pack 3.0 ユーザーガイド』

中心となる製品である OVPI のマニュアルと、OVPI 上で動作するレポート機能についてのマニュアルは、次の Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.hp.com/managementsoftware> (英語)

[Support]>[製品マニュアル(英語)]と選択すると、「Product manual search」のページが表示されます。OVPI のマニュアルは [1. Product] で [Performance Insight] を選択すると表示されます。また、レポートパッケージ、データパイプ、および NNM SPI のマニュアルは、[Reporting and Network Solutions] を選択すると表示されます。

日本語のマニュアルは以下の URL から入手できます。

<http://www.jp.hp.com/doc/manual/openview/index.html>

[Reporting and Network Solutions] の下のマニュアルには、発行年月が示されています。ユーザーガイドが改訂されて新しいものが公開されると、ソフトウェアのバージョン番号が変わらない場合でも、発行年月が変わります。改訂したマニュアルは定期的に公開されるため、このサイトを見て更新されていないかを確認して、最新版でない可能性のある古い PDF を参照するのは避けてください。

Preprocessor のインストール

この章では、次の項目について説明します。

- インストールの前提条件
- **Stratacom Preprocessor** のインストール
- 正しくインストールされたことを確認するテスト
- パッケージの削除

環境変数は次のように表記します。{*VARIABLE*}

インストールの前提条件

Stratacom Preprocessor は、特定バージョンの **OVPI** を必要としません。ただし、次のソフトウェアが必要です。

- Perl 5.x

ATM Report Pack と **Frame Relay Report Pack** は、**Stratacom Preprocessor** に必須ではありません。**Stratacom Preprocessor** のインストール時に、これらをインストールすることもできますが、後でインストールすることもできます。

OVPI を分散環境で使用している場合、中央サーバーと各サテライトサーバーにレポートパックをインストールする必要があります。**Stratacom Preprocessor** をインストールする必要があるのは、中央サーバーのみです。ただし、その他のサーバーにもインストールすることも可能です。

パッケージの内容

Stratacom Preprocessor には、以下が含まれています。

- Perl スクリプト
- 設定ファイルの例
- **Stratacom Preprocessor** を制御するプロシージャファイル (.pro)

パッケージをインストールすると、Perl スクリプトは **bin** ディレクトリにコピーされます。また Perl スクリプトを呼び出すプロシージャファイルは、**scripts** ディレクトリにコピーされます。

ディレクトリ構造

Stratacom Preprocessor は、いくつかのファイルとディレクトリを認識しないと動作しません。詳細については、次の表を参照してください。

ディレクトリ	機能	デフォルト
Save	入力データのコピーを保存します。	{STRATACOM}/save
Config	Stratacom Preprocessor の設定ファイルを格納します。	{STRATACOM}/config
Out	Stratacom Preprocessor の出力ディレクトリ	{STRATACOM}/out
In	Stratacom デバイスから取り出された統計ファイルの場所	{STRATACOM}/in
Work	Stratacom Preprocessor からの出力を格納します。	{STRATACOM}/work
trend.log	プロセスの開始時刻と終了時刻を記録します。	{STRATACOM}/tmp/trend.log

環境変数の設定

これらのディレクトリのデフォルトの場所は、*{STRATACOM}* と呼ばれる環境変数を利用しています。デフォルトディレクトリを使用するには、trendadm のユーザーに対してこの変数を設定する必要があります。次の手順に従います。

- 1 {DPIPE_HOME}/lib/Cshrc に移動します。
- 2 次の行を追加します。 **setenv STRATACOM <directory>**
- 3 OVPI Timer を再起動します。

デフォルトを使用しない場合は、.pro ファイルを編集して、使用する値を入力する必要があります。

Windows で Stratacom 環境変数を設定

環境変数の値を追加または変更するには、以下の手順を実行します。

- 1 [設定]>[コントロールパネル]をクリックし、次に[システム]をダブルクリックします。
- 2 以下に示すように、[詳細]タブで[環境変数]をクリックし、変更したいユーザー変数またはシステム変数の名前をクリックします。
 - 新しい変数名と値を追加するには、[新規]をクリックします。
 - 現在の変数名と値を変更するには、[編集]をクリックします。

- 変数名と値を削除するには、[**削除**]をクリックします。
 - ▶ 管理者としてローカルコンピュータにログオンしていない場合、変更できる環境変数はユーザー変数だけです。
 - ▶ **Windows 2000** はレジストリに変更内容を保存します。したがって、次回コンピュータを起動すると、変更内容は自動的に利用可能となります。新しい設定値を有効にするには、動作しているプログラムを終了して、再起動する必要があります。
 - ▶ PC 上でこれらの手順を表示するには、[**スタート**]>[**ヘルプ**]を選択します。「**環境変数**」で[**キーワード**]検索を行って、「**追加**」を選択します。

Stratacom Preprocessor のインストール

RNS 7.0 CD のパッケージをシステムの **Packages** ディレクトリにまだ抽出していない場合は、RNS 7.0 CD を挿入し、画面の指示に従って **OVPI** レポートパックを抽出します。**Windows** では、自動的に画面上の指示が表示されます。**UNIX** では、**CD** をマウントし (**CD** のマウントが必要な場合)、**CD** の最上位ディレクトリに移動して、次のコマンドを実行します。

./setup

OVPI パッケージが **Packages** ディレクトリに抽出されると、インストールスクリプトは、**Performance Insight** を起動してパッケージマネージャを開始するよう、プロンプトを表示します。**CD** からパッケージを抽出し、パッケージマネージャを実行している場合は、手順 4 から開始してください。

- 1 システムにログインします。**UNIX** システムでは **root** でログインします。
- 2 **OVPI Timer** を停止し、プロセスが終了するのを待ちます。

Windows NT: [**設定**]>[**コントロールパネル**]>[**管理ツール**]>[**サービス**]の順に選択します。

HP-UX: **sh /sbin/ovpi_timer stop**

Solaris: **sh /etc/init.d/ovpi_timer stop**

- 3 **Performance Insight** を起動してパッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの[**ようこそ**]ウィンドウが開きます。
- 4 [**次へ**]をクリックします。[**OVPI** パッケージの場所]ウィンドウが開きます。
- 5 [**インストール**]をクリックします。デフォルトのインストールディレクトリを承認するか、別のディレクトリを選択します。
- 6 [**次へ**]をクリックします。[**レポートの配布**]ウィンドウが開きます。[**レポートの配布**]を無効にします。アプリケーションサーバーの名前とポートについてはデフォルトを受け入れます。(**Frame Relay** や **ATM** などのレポートパックもインストールしている場合は、[**レポートの配布**]のデフォルトのままにしてください。)
- 7 **OVPI** アプリケーションサーバー用のユーザー名とパスワードを入力します。
- 8 [**次へ**]をクリックします。[**パッケージの選択**]ウィンドウが開きます。

- 9 *Stratacom_Preprocessor* の横にあるチェックボックスをクリックします。
- 10 [次へ] をクリックします。[タイプの検出] ウィンドウが開きます。パッケージのインストール直後に検出を実行するには、[検出] オプションを選択したままにします。
- 11 [次へ] をクリックします。[概要] ウィンドウが開きます。
- 12 [インストール] を選択します。[インストールプロセス] ウィンドウが開き、インストールが開始されます。インストールが完了すると、パッケージのインストール完了メッセージが表示されます。
- 13 [完了] をクリックします。
- 14 OVPI Timer を再起動します。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]の順に選択します。

HP-UX: `sh /sbin/ovpi_timer start`

Solaris: `sh /etc/init.d/ovpi_timer start`

正しくインストールされたことを確認するテスト

Stratacom Preprocessor が正しくインストールされていることを確認するには、DPIPE_HOME ディレクトリでコマンドプロンプトを起動し、次のコマンドを入力します。

```
perl bin/stratacom_preprocessor.pl -h
```

パッケージが正しくインストールされていれば、ヘルプ画面が表示されます。

.pro ファイルのテスト

プロシージャファイルがスクリプトを正しく呼び出していることをテストするには、以下を実行します。

- 1 ソースディレクトリにファイルがないことを確認します。
- 2 DPIPE_HOME ディレクトリでコマンドプロンプトから次のコマンドを入力します。

```
trend_proc -f scripts/StratacomPreprocessor.pro
```
- 3 trend.log に、スクリプトの開始と終了が記録されていることを確認します。

出力ディレクトリ

Stratacom Preprocessor をインストールすると出力ディレクトリが作成されます。Stratacom Preprocessor の出力ディレクトリは、Stratacom データパイプの SourceDirectory としての役割があります。出力ディレクトリへのパスは次のようになります。

```
{DPIPE_HOME}/data/ImportData/Stratacom
```

出力ディレクトリの場所は固定されています。変更しないでください。

パッケージの削除

Stratacom Preprocessor をアンインストールするには、次の手順に従います。

- 1 OVPI Timer を停止し、プロセスを終了させます。
Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]の順に選択します。
HP-UX: `sh /sbin/ovpi_timer stop`
Solaris: `sh /etc/init.d/ovpi_timer stop`
- 2 パッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの[ようこそ]ウィンドウが開きます。
- 3 [次へ]をクリックします。[OVPI パッケージの場所]ウィンドウが開きます。
- 4 [アンインストール]を選択して画面上の指示に従います。削除するパッケージを選択する画面が表示されたら、*Stratacom_Preprocessor* を選択します。
- 5 [次へ]をクリックします。[概要]ウィンドウが開きます。
- 6 [アンインストール]をクリックします。[アンインストールの進捗状況]ウィンドウが開き、削除が開始されます。削除が完了すると、パッケージの削除完了メッセージが表示されます。
- 7 [完了]をクリックします。
- 8 OVPI Timer を再起動します。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]の順に選択します。

HP-UX: `sh /sbin/ovpi_timer start`

Solaris: `sh /etc/init.d/ovpi_timer start`

Stratacom Datapipe のインストール

本章では、次の項目について説明します。

- 円滑なインストールのためのガイドライン
- Stratacom Datapipe のインストール
- パッケージの内容
- 入力ファイル名
- TEEL ファイルとデフォルトの指令
- Datapipe の削除

円滑なインストールのためのガイドライン

RNS 7.0 CD には、NNM のコンポーネント、および OVPI のレポートパックとデータパイプが収録されています。OVPI パッケージのインストールを選択すると、CD 上のインストールスクリプトは CD からすべての OVPI パッケージを抽出し、それをシステムの Packages ディレクトリにコピーします。この処理が終わると、インストールスクリプトは、Performance Insight を起動してパッケージマネージャのインストールウィザードを開始するよう、プロンプトを表示します。

RNS 7.0 CD 上の OVPI パッケージのいずれかをすでにインストールしている場合、OVPI に関連するパッケージがシステム上にすでに存在し、インストールに利用することができます。パッケージマネージャを起動して Stratacom Datapipe をインストールする前に、次のガイドラインを確認してください。

ソフトウェアの前提条件

Stratacom Datapipe には次の前提条件があります。

- OVPI 5.0
- OVPI 5.0 に提供されているすべてのサービスパック
- Stratacom Preprocessor 3.0
- Frame Relay Report Pack 4.0 または ATM Report Pack 3.0

ただし、データパイプはアップグレードできません。古いバージョンの Stratacom Datapipe を使用している場合は、まず始めに古いバージョンを削除してください。

分散環境

OVPI を分散環境で使用している場合、インストールプロセスはより複雑になります。Stratacom Datapipe は、ポーリングを実行するあらゆるサーバーにインストールする必要があります。通常は、分散環境の中央サーバーではポーリングを行いません。

Stratacom Datapipe のインストール

RNS 7.0 CD を挿入し、画面上の指示に従って OVPI レポートパックを抽出します。Windows の場合は、パッケージを抽出するための [メインメニュー] が自動的に表示されます。UNIX では、root としてログインして、CD をマウントし (CD が自動的にマウントされない場合)、CD の最上位ディレクトリに移動して `./setup` コマンドを実行します。

OVPI パッケージが抽出されてシステムにコピーされたら、インストールスクリプトは、Performance Insight とパッケージマネージャを起動します。CD からパッケージを抽出し、パッケージマネージャが実行されている場合は、手順 4 から開始してください。パッケージマネージャを実行していない場合は、手順 1 から始めてください。

- 1 システムにログインします。UNIX システムでは root でログインします。
- 2 OVPI Timer を停止し、プロセスが終了するのを待ちます。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]の順に選択します。

UNIX: root で次のいずれかを実行します。

HP-UX: `sh /sbin/ovpi_timer stop`

Sun: `sh /etc/init.d/ovpi_timer stop`

- 3 [管理コンソール] からパッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの [よろこ] ウィンドウが開きます。
- 4 [次へ] をクリックします。[OVPI パッケージの場所] ウィンドウが開きます。
- 5 [インストール] をクリックします。デフォルトのインストール先ディレクトリを受け入れるか、必要に応じて別のディレクトリを指定します。
- 6 [次へ] をクリックします。[レポートの配布] ウィンドウが開きます。OVPI アプリケーションサーバー用のユーザー名とパスワードを入力します。
- 7 [次へ] をクリックします。[パッケージの選択] ウィンドウが開きます。次のパッケージのいずれかまたは両方のチェックボックスをクリックします。

Stratacom_ATM_Datapipe

Stratacom_FR_Datapipe

- 8 [次へ] をクリックします。[タイプの検出] ウィンドウが開きます。デフォルトを消去します。
- 9 [次へ] をクリックします。[概要] ウィンドウが開きます。

- 10 [インストール]を選択します。[インストールの進捗状況]ウィンドウが開き、インストールが開始されます。インストールが完了すると、パッケージのインストール完了メッセージが表示されます。
- 11 [完了]をクリックします。
- 12 OVPI Timer を再起動します。

Windows NT: [設定]>[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]の順に選択します。

UNIX: root でログインし、以下のいずれかを入力します。

HP-UX: `sh /sbin/ovpi_timer start`

Sun: `sh /etc/init.d/ovpi_timer start`

パッケージの内容

Stratacom Datapipe のパッケージには、以下が含まれています。

- テーブルとファイルフォーマットを定義する **TEEL** ファイル
- `ee_collect` と `trendmapper` に対する呼び出しを制御するプロシージャ (`.pro`) ファイル
- 主要なデータをフォーマットする **Rex** ファイル
- データをレポートパックに送り出すローテーションファイル
- **Stratacom Preprocessor** 用の設定ファイル

パッケージがインストールされると、プロシージャファイルは `scripts` ディレクトリに配置され、`rex` ファイルは `bin` ディレクトリに配置されます。

入力ファイル名

Stratacom Preprocessor は、`ee_collect` に適した ASCII CSV ファイルを作成します。ファイル名は元のスイッチのファイル名と **Stratacom** オブジェクト識別子を使用します。以下に、Stratacom ATM のデータパイプで使用される出力ファイル名の例を示します。

- `filename.0.7`(ATM ポートの割合データを含みます。)

TEEL ファイルと指令

TEEL ファイルは、動作環境を反映するように修正する必要があります。特定の指令はプラットフォーム固有のものですが、その他の指令はカスタマまたはサイト固有のもので、ファイル単独で、その指令がプラットフォーム、カスタマ、またはサイト固有のものがわかります。

SourceDirectory

Stratacom Datapipe の SourceDirectory は、Stratacom Preprocessor 用のデフォルトの出力ディレクトリです。Stratacom Datapipe のデフォルトの SourceDirectory は、次のようになります。

```
{DPIPE_HOME}/data/ImportData/Stratacom
```

出力ディレクトリが正しいことを確認するとともに、環境変数 {STRATACOM} が *trendadm* ユーザーに対して正しくセットアップされていることも確認してください。デフォルトディレクトリの詳細については、第 2 章の「ディレクトリ構造」を参照してください。

SourceDisposition

TEEL ファイルには、次のデフォルト SourceDisposition が含まれています。

```
{STRATACOM}/eecollected
```

別の配置やファイルの場所を使用したい場合は、TEEL ファイルを変更する必要があります。SourceDisposition で {STRATACOM} 環境変数を使用している場合は、*trendadm* ユーザーに対してその変数が正しくセットアップされていることを確認してください。

Datapipe の削除

Stratacom Datapipe をアンインストールするには、次の手順に従います。

- 1 システムにログインします。UNIX システムでは **root** でログインします。
- 2 OVPI Timer を停止し、プロセスが終了するのを待ちます。
- 3 [管理コンソール] からパッケージマネージャを開始します。パッケージマネージャの [よろこ] ウィンドウが開きます。
- 4 画面上の指示に従ってパッケージの削除を行います。アンインストールが完了すると、パッケージの削除完了メッセージが表示されます。
- 5 [完了] をクリックします。
- 6 OVPI Timer を再起動します。

設定ファイルの編集

Stratacom Preprocessor を設定することで、さまざまな種類の統計情報を出力できます。設定ファイルはデータパイプに付属しており、**Preprocessor** が出力する統計情報の種類を決定します。

データパイプは、付属の設定ファイルを **Stratacom Preprocessor** が使用する **Config** ディレクトリにコピーしない限り、正しく動作しません。このディレクトリの詳細については、10 ページの「ディレクトリ構造」を参照してください。

カスタマイズしたデータパイプをインストールしている場合は、カスタマイズした設定ファイルが必要です。

設定ファイルのフォーマット

設定ファイルは **ASCII** テキストファイルです。設定ファイルの名前は、該当する **Stratacom** クラスによって決まります。たとえば、フレームリレーのインタフェースの統計情報は、**stratacom.3** と呼ばれるファイルに定義されています。

設定ファイルには、任意の行にコメントを記載できます。ハッシュ記号 (**#**) は、コメントの開始を示します。統計情報が必要であることを示すには、**Stratacom** の識別番号を行に入力します。各行に 1 つの統計番号だけを入力してください。

CLASSNAME=<name> がサポートされています。この指令が設定ファイル内にあれば、クラス番号の代わりに **<name>** が、出力ファイルの識別に使用されます。

利用可能な統計情報およびその番号付けについては、**Cisco** が提供する **Stratacom** のマニュアルを参照してください。

設定ファイルの例

```
#####
#
# Version @(#) stratacom.0.2 /main/1 tegggers Thu Apr 23 22:47:53 2003 @(#)
# Solutions Engineering Group
# Copyright 2003, Hewlett-Packard Company
# Package: Stratacom FrameRelay
#
```

#####

This file is used to configure which Stratacom statistics the preprocessor should output.
 # The order of the statistics below is preserved in the output file.
 # The name of this file should indicate which particular object type we are configuring.
 # Filename is objectnum.subobjectnum, eg 0.2 is for frame relay connections.
 # Each stat number mentioned causes two columns to be output, one for total and one for peak.
 # If peaks are not enabled then nulls are produced.
 # If a stat mentioned below is not found in the file nulls are output.

#-----

#number#	Stratacom name	# maps to column
#	#	#
16	# seconds in service	# AvailableSeconds
21	# DE frames received	# InAmberFrames
24	# DE bytes received	# InAmberOctets
1	# Rx Frames discarded	# InDiscards
30	# IWF frames Rx with EFCI set	# InFECNFrames
0	# Frames Rx	# InFrames
9	# Bytes RX	# InOctets
22	# DE Frames	# OutAmberFrames
28	# Bytes TX in xs CIR	# OutAmberOctets
18	# Frames Tx with BECN	# OutBECNFrames
17	# Frames Tx with FECN	# OutFECNFrames
2	# Frames Tx	# OutFrames
11	# Bytes Tx	# OutOctets

E

ee_collect に対する呼び出し , 17

P

Product manual search, 8

R

Rex ファイル , 17

S

stratacom_preprocessor.pl, 12

StratacomPreprocessor.pro, 12

T

trendmapper に対する呼び出し , 17

か

環境変数 , 10

さ

出力ディレクトリ , 12

た

ディレクトリ構造 , 10

デフォルト SourceDisposition, 18

デフォルトの SourceDirectory, 18

は

パッケージの削除 , 13

プロシージャファイル , 17

分散システム , 9

ら

ローテーションファイル , 17

